特集論文

短期ボランティアツーリズムの地域課題への積極的参加手段としての可能性
――東日本大震災支援ツアーを事例として

依田 真美
（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程）

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

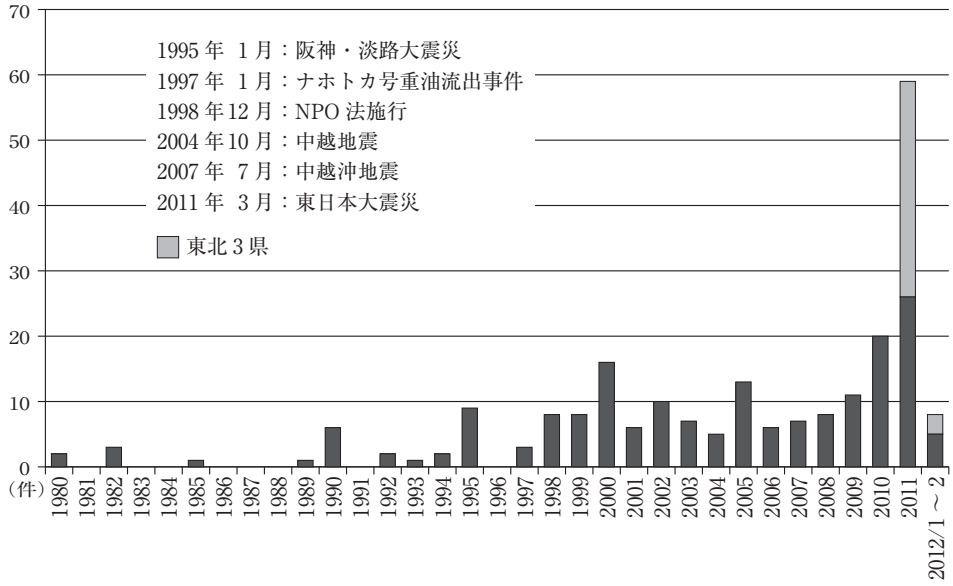
ボランティア活動を目的とした旅行である「ボランティアツーリズム」への参加が日本でも徐々に増えている。ボランティアツーリズムの定義の詳細については後述するが、日帰り旅行も含めた日常生活圏外でボランティア活動を行った経験のある首都圏住民は、2012年2月の調査では、11.5%となった（依田 2012）。活動への参加（開始）件数[1]は1990年代後半から増減を繰り返しつつも増える傾向にあったが、2011年には東日本大震災の復興支援を目的とした活動が急増した（図表-1）。また、その影響もあり、「ボランティアツアー」という言葉の認知率も、震災前の11.3%から2012年2月では51.5%に上昇した。

欧米やオセアニアでも、1990年代後半からボランティアツアーへの参加者が急増し、その数は英国と米国だけでも少なくとも12万人を超えると推計される（Tourism Research and Marketing 2008）。一定期間を仕事や学業を離れ、異なる活動に従事する「Gap Year」と呼ばれる20代人口が増加したこと（Callanan and Thomas 2005）の影響が大きいが、その背景としては、企業や教育機関による海外でのボランティア体験への評価が高まったことや、移動手段の提供や活動内容・団体の選択を含めた多様なパッケージ型ツアーが登場し、参加が容易になったことなどがあげられる。

2000年代に入ると欧米やオセアニアの研究者を中心に、ボランティアツーリズムを対象とした研究が始まった（依田 2011）。そこでは、利他的行為であるボランティア活動を含むボランティアツーリズムは、「もう一つの観光（alternative tourism）」や「持続可能な観光（sustainable tourism）」、「責任ある観光（responsible tourism）」として捉えられ（Callanan and Thomas 2005）、地域の自然資源や文化資源を過剰消費してきたマスツーリズムとは異なり、参加者と受け入れ地域双方にとってメリットのあるツーリズムとなる可能性があると指摘されている（McGehee 2012; Wearing 2001; Callanan and Thomas 2005）。それは、同ツーリズムが「密度の濃い」「相互作用」（Wearing 2001; Sin 2009）であることから、参加者が受け入れ地域の異文化から学ぶと同時に（Broad 2003; McIntosh and Zahra 2007）、自己や自国の文化を見直し、新たな人生観や世界観を獲得する機会となる可能性が高いためである（Sin 2009; Lo and Lee 2011）。また、共同生活を通じ、他者に対する寛容や自己に対する自信を深める機会ともなっている（Broad 2003; McGehee and Santos 2005; Sin 2009; Lo and Lee 2011）。

このような体験が参加者と地域の関係性を変える可能性があるという主張の一方で、プロジェクトの効果に対する疑問や（McGehee and Andereck 2009; Callanan and Thomas 2005）、地域ニーズとボランティア活動内容の不一致（Gray and Campbell 2007; Butcher 2003; McGehee and Andereck; 2009）などのマイナスの影響や、ボランティアツーリズムでの体験が

図表-1 日常生活圏外ボランティア活動参加（開始）数の推移



注: 活動数合計227件
出典: 依田（2012）

参加後の行動変化に結びつかないという限界についての指摘もある（Ver Beek 2006; Coghlan 2008）。最近では、観光の要素が強い「浅い」ボランティアツーリズム（Callanan and Thomas 2005: 図表-2）は従来のツーリズムと変わらないが、ボランティア活動に焦点を置いた「深い」ボランティアツーリズムは、地域と参加者の関係性を変える可能性があるという見方を支持する研究が多い（依田 2011）。

これらの先行研究を参照する上で、その多くは欧米やオセアニアを発地とし、発展途上国を訪問するツアーを対象としていることに留意したい。Callanan and Thomas（2005）は、ツーリストについても区分しているが、そこでの「浅い」と「中程度」を分ける参加期間の目安は1カ月である（図表-3）。しかし、日本では長期休暇やGap Yearの取得が普及していないため、欧米やオセアニアのような数週間以上にわたるボランティアツアーの参加は非常に限られている。首都圏住民を対象とした調査では、日常生活圏外のボランティア活動への参加実績のうち、国外の活動が占める比率は全体の5.7%であり、活動期間の中央値は5日間であった[2)]。また、国内の居住地域都県外の活動期間の中央値は、3日間となった。このように、日本のボランティアツアーの一回あたりの参加期間は短いが、同調査では一般の活動で77.0%、被災地支援では90.9%の参加者が今後の参加を希望しており、訪問地域の課題に対する継続的な参加への強い関心を持っていることが注目される。桜井（2007）は、活動の継続や活動内容の拡大を「活動の積極化行動」と呼んでいるが、短期ツアーの多い日本では、これらの関心を実際の積極化行動へとつなぐことが、地域とツーリスト双方にメリットのあるボランティアツーリズムを実現するためのひとつのきっかけとなる可能性がある。しかし、ボランティアツーリストの活動の継続や活動内容の拡大に関する研究はほとんどない。

そこで、本研究では、このように短期滞在が多い日本のボランティアツーリズムの事例を取り上げ、短期ボランティアツーリズムの参加者が地域課題への関わりを積極化するための要因を、社会運動論や学習理論を参照しつつ明らかにする。なお、本研究では短期ツアーを1週間以下のツアーと定義する。

図表-2 ボランティアツアーの類型

ボランティアツアー	浅い（Shallow）	中程度（Intermediate）	深い（Deep）
参加期間の柔軟性	高い柔軟性があり、参加者が選べる。	高い柔軟性があり、参加者が選べる。	ボランティアではなく、主催機関が参加時期や期間を設定することが普通である。
募集における行き先とプロジェクト内容の重要性	行き先やオプションツアーの機会を強く訴えかける。	行き先を踏まえた上で、プロジェクトを訴えかける。	プロジェクトや活動、現地のコミュニティ、地域、地域にとってのプロジェクトの価値について強調する。
ターゲット層：利他的なグループ　対　自分の興味が強いグループ	学校での単位認定などに関連した体験や技術の習得が可能であることを訴えかける。	学校での単位認定などに関連した体験や技術の習得が可能であることと並んで、訪問地域への貢献を訴えかける。	仕事内容がどれだけ訪問地域にとって価値があるかに、より焦点を絞る。文化的な体験、本質的、相互関係を訴えかける。
参加者の技術水準や資格に対する要件	特になし。もしくは、最低限の技術要件。	要求されているとしても、ほどほどのスキルに限られている。あれば望ましい。	技術や経験、資格、時間などに注目する。
能動的 / 受動的参加	受動的な参加。	適度な参加。	活発な参加。地域に密着。
地域への貢献度	個人の地域への貢献は限られているが、それらが集まった時には地域にとって価値のある活動となることもある。意思決定に地域がどれだけかかわっているかについての情報は限られている。	個人の地域への貢献はほどほどであるが、集合として捉えた時には、明らかに地域にとって価値のある活動となっている。意思決定に地域がどれだけ関わっているかについての情報は限られている。	ボランティアの地域への直接的な貢献は明らかである。地域がどのようにプロジェクトの意思決定に関わっているかについての情報も明らかである。

出典: Callanan and Thomas（2005）（筆者訳）

図表-3 ボランティアツーリストの類型

ボランティアツーリスト	浅い（Shallow）	中程度（Intermediate）	深い（Deep）
参加期間の柔軟性	訪問先が重要。	プロジェクトと訪問先の両方が重要。	プロジェクトが重要。
参加期間	短い。通常は 4 週間以下。	中程度。通常は 6 カ月以下。	中程度から長期。6 カ月、もしくはそれより短い期間での集中参加。
体験目的 : 利他的か自分の興味か	自分の興味の重要性が利他的理由を上回る。	利他的理由も自分の興味も重要。	利他的理由が自分の興味よりも重要。
参加者の技術水準や資格要件	最低限の技術または資格要件。	一般的なスキルを提供。	専門的技術や経験や時間を提供。
能動的 / 受動的参加	より受動的な傾向。	能動的な面と受動的な面が入り混じった参加。	より能動的な傾向。
地域への貢献度	地域への直接的な貢献は小さい。	地域への直接的な貢献は中程度。	地域への貢献は大きい。

出典: Callanan and Thomas（2005）（筆者訳）

(2) 用語の定義

本項では、主な用語の定義をする。まず、「ボランティアツーリズム」であるが、「ボランティア」については、ボランティア三原則「強制されず、無償で、他者を助ける活動」（Kendall and Knapp 1996）を用いる。さらに、ボランティアは多様な形態をとり、その原則が揺らいでいること[3]（Lyons 2003）を考慮し、厳密にこれらの原則を満たさなくても、一般に「ボランティア」と呼ばれている活動も含めることとする。

また、「ツーリズム」については、「継続して1年を超えない範囲で、日常生活圏の外に旅行し、

訪問地で報酬を得る活動を行うことと関連しない諸活動」とする[4]。従って、ボランティアツーリズムは、「継続して1年を超えない範囲で、日常生活圏の外で行う、強制されない、無償の、他者を助ける活動を含む行為」と定義する。この定義に基づき、本論文の対象には、旅行会社が主催するパッケージツアー以外に、NPO・NGOなどによるボランティア機会、移動、宿泊の提供や仲介などの組み合わせによる現地集合現地解散の活動も含める。

なお、「ボランティアツーリズム」は同ツーリズム一般を指す場合に、「ボランティアツアー」は個別のツアーを指す場合に用いる。また、ボランティアツアーの参加者は、「参加者」または「ボランティアツーリスト」と呼ぶ。ボランティアツーリストを受け入れる地域は、「受け入れ地域」または「地域」と呼ぶ。

(3) 研究方法と事例の選定

本研究では、ツアーの主目的は共通だが、ツアーの内容、参加者層、実施過程が異なる2つの短期の被災地支援ツアーを取り上げた。具体的には、訪問先での買い物による復興支援を含む大手旅行会社によるパッケージ型ツアーと、任意団体による現地発着の宿泊・移動支援およびボランティア団体仲介サービスにより構成されるツアーを取り上げた。ツアー期間は前者が車中1泊を含む2泊3日、後者は平均約3日である。

事例研究にあたっては、現地での参与観察やツアー後の関係者へのインタビューを行った。また、調査対象は、ツアーからの直接的な影響に焦点を当てるため、実施期間とその後半年程度に実施された主催運営団体や関連グループ活動とした。

2. 先行研究

ボランティアツーリズムにかんする先行研究で、地域の社会的課題解決に対するボランティアツーリストの継続的な関わりや役割拡大などの積極化行動の要因を分析しているものは少ない。これは、ボランティアツーリズム研究の蓄積が限られていることに加え、先進国から発展途上国へのツアーが対象となっていることが多いため（依田 2011）、距離や渡航費用負担を考えると、参加後の継続的な関わりを想定することが難しいことが理由だと考えられる。

積極化行動を考える上では、社会運動参加の媒体・支援手段としてのボランティアツーリズムの可能性を検討した“Social Change, Discourse and Volunteer Tourism”（McGehee and Santos 2005）が、参考になると考えられる。同論文では、社会運動を「社会のある大きな側面を変革する（または、変化に抵抗する）ための著しい数の人々による組織化された努力」（Marshall 1994: 489）と定義した上で、Knoke（1998）とKlandermans（1992）の研究から明らかとなった社会運動の参加・活動の2つの重要な予測因子――社会的ネットワーク（social network）と意識高揚（consciousness-raising）――とボランティアツーリズムの関係について、フォーカスグループインタビュー[5]で得られたデータに基づき分析している。

ボランティアツアーの目的であるボランティア活動は、それ自体がそもそも「社会のある大きな側面を変革する（または、変化に抵抗する）ための著しい数の人々による組織化された努力」の一部である。従って、McGehee and Santos（2005）の研究は、ボランティアツアーで関わることになった社会課題や地域課題に更に積極的に関わるための要因を明らかにする試みと捉えることもできる。

McGehee and Santos（2005）は、ボランティアツアーを通じて構築されたネットワークに関し、①人種や文化の違いを乗り越え、②ツアー後も続いて人生に影響を与え、③社会問題の持つグローバル性に気付くことで自らのアイデンティティの探求を促し、④社会運動への新たな参加や、生活での信条の実践を促す効果があることを明らかにしている。

また、ボランティアツーリズムが、限られた期間の活動であるのにもかかわらず、意識高揚やネットワーク形成に有効である理由として、①共通の関心を持つ参加者が集まりやすい、②インパクトの強い体験を持つことが多い、③そのような体験

はグループの中で起こることを指摘している。加えて、参加者が参加後の振り返りやつながりの再形成機会を求めていることも指摘している。

ボランティアツーリズムの持つ意識高揚の効果に関連する研究としては、Coghlan and Gooch（2011）が、ボランティアツーリズムを「変容的学習」[6]と捉え、先行研究で取り扱われた事例をメジロー（Jack Mezirow）の10の変容的学習プロセス[7]と比較したものが挙げられる。Coghlan and Goochの分析によれば、10のプロセスのうち、「行動計画の作成」と「新たな役割の試行とそれに対する評価」を除く、8プロセスがボランティアツーリズムのプロセスと合致することが明らかとなった。

このように、ボランティアツーリズムの参加は、意識を高め、変容し、その後の行動を変化させる可能性があり、そのような変化とネットワーク形成とが相まって、継続した社会運動参加へとつながる（McGehee and Santos 2005）。そこで、本研究では意識変容は意識高揚に含まれる概念と位置付けた上で、これらの要素に着目しながら、参加者の活動への積極的参加要因について分析をする。

3. 事例研究：東日本大震災復興支援ツアー

以下では、2つの東日本大震災支援ツアーを取り上げ、ツアー内容とその後の活動について整理をする。ツアー内容の整理に当たっては、活動への積極的行動を促進すると考えられる、ネットワーク形成や意識高揚の要因である①参加者の目的共有、②体験のインパクト、③グループとしての体験を中心にまとめる。

(1) 震災支援ボランティアツアー（パッケージツアー型）：南三陸町ボランティア＆応援ツアーin福興市 6月Aコース

(a) 概要

同ツアーは、近畿日本ツーリスト株式会社が2011年6月に実施したボランティアツアーである。目的地の宮城県南三陸町の沿岸部はリアス式海岸で、東日本大震災では壊滅的な被害を受けた。2011年2月末時点の人口は17,666人だったが、6月29日時点での震災による死者と行方不明者（届け出数）は542名と664名であった。同ツアーは、申し込み時点（2011年5月）では数少ない大手旅行会社によるボランティアツアーであり、ボランティアに加え、福興市での買い物を旅程に含む点や、温泉旅館に宿泊する点が、それまでの多くのツアーと異なった。

旅程は1泊3日（1泊は車中泊）で、企画協力者であるユナイテッド・アースが、ボランティア活動の受け入れ先となった。代金は1泊3日、朝食2回、昼食・夕食各1回で、39,800円であったが、その内5,000円はユナイテッド・アースへの義捐金であった。参加者は36名で、添乗員1名と運転手2名が同行した。

ツアーは、金曜午後11時に東京駅近くから出発し、翌朝8時前に南三陸町に到着した。車内で朝食をとりながら、福興市実行委員長の挨拶や地元ボランティア「語り部ガイド」から被災体験を聞き、被害の大きかった町の中心地を簡単に見学した後、ボランティア活動場所へ移動し、作業を開始した。

ボランティア作業の内容は、男性は福興市の会場設営、女性は福興市で実施される写真展と「語り部教室」の準備であった。作業は午後3時半頃終了し、その後、バスで宿泊地に向かった。宿泊は基本的には男女別相部屋だが、追加料金を支払えば個室を指定することができた。翌日は、福興市で買い物をし、午後1時に会場を出発、午後9時半頃東京に戻るという旅程であった。

(b) 特徴

同ツアーは同時期に実施された、ボランティア活動だけを目的とした震災復興支援ツアーと比べ、グループや夫婦での参加が多かった。作業は軽作業に限られ、宿泊には個室の選択もできる温泉旅館を利用し、買い物という楽しみの要素もあったことが理由だと考えられる。従って、参加者の目的は、ボランティア活動にとどまらず、買い物や同行者との交流も含んでいたと考えられる。

次に、体験のインパクトに関しては、語り部ガ

イドの被災体験を聞き、被害の大きな地域を実際に歩いたことは、南三陸町の状況に対する理解を深めたと考えられる。しかし、ボランティア作業は被災の限定的な場所での軽作業であったため、作業を通じた達成感や状況理解、感動などは限られていた。

グループとしての体験は、ボランティア作業に限られていたが、その作業も活発なコミュニケーションを必要としなかった。また、旅館での時間は自由行動であったが、個室利用者らは同行者とのコミュニケーションを優先させることが多く、その他の参加者とのコミュニケーションは限られていた。

(c) ツアー後の状況

ボランティア受け入れ先であったユナイテッド・アースが、7月初旬に都内でツアー後の参加者交流会を企画したが、申し込み数が少なく中止となった。ツアーを通し、南三陸町の状況についての理解や共感は深まったが、再会を望むまでの強い参加者間のネットワークを形成できなかったことが、申し込みが少なかった理由と考えられる。

(2) 震災支援ボランティアツアー（現地集合解散、日程自由設定型）：ふらっとーほく

(a) 概要

「ふらっとーほく」とは、3名の20代から30代の若者が2011年4月に開始した任意団体による活動である。宮城県蔵王町の旅館の協力のもと、宮城県亘理町のボランティア・センターを中心としたボランティア先の紹介と、蔵王町の旅館での宿泊、センターと宿舎間の車での送迎をセットにしたボランティア支援活動を行っていた。

ボランティア活動の対象となった亘理町は、仙台の南27kmに位置する沿岸部の町で、イチゴの産地として有名である。2011年9月30日時点の人口は、34,371人で、東日本大震災では256名の死者と6名の不明者があった（2011年7月5日時点）。宿泊地である蔵王町は、亘理町から約30km内陸部に位置する。

ふらっとーほくのサービスは、事前予約の上、随時利用可能であった。ボランティア・センターまで自力で行き、活動終了後に送迎を受けるか、活動前日に亘理町駅などで待ち合わせることが一般的な参加初日の旅程であった。朝は7時過ぎに宿を出発し、8時半頃にボランティア・センターに到着、その後はセンターの指示に従い活動を行う。活動終了後は、午後4時頃に送迎があり、蔵王町に移動する。夕食は地域の飲食店を利用した。

参加者は亘理町までの交通費と食費を自己負担するほか、1泊1,500円から2,000円の宿泊費を支払った。旅館は男女別の大部屋に分かれて利用し、布団の上げ下げや清掃はセルフサービスで行った。なお、ふらっとーほくの運営は無償ボランティアで行われていた。

(b) 特徴

ふらっとーほくは、ボランティア活動への参加を支援することを目的とした仕組みであり、観光や買い物など他の要素はあらかじめ組み込まれていなかった。従って、ふらっとーほくへの参加者の目的は、ボランティア活動で一致していたと考えられる。

次に、体験のインパクトであるが、ボランティア活動は個々の参加者がボランティア・センターの指示に従って行うため、そのインパクトもそれぞれの活動内容によると考えられる。しかし、活動内容が軽作業に限られているわけではなく、多くの参加者はヘドロ除去など被災の厳しい場所での活動に参加したため、そのインパクトは、南三陸町ツアーとの比較では、大きい場合が多かったと考えられる。それに加え、ふらっとーほくの運営者は、ボランティア活動終了後に被害の大きな沿岸部へ参加者を案内することも日常的にあった。そのような活動は、参加者の被災状況の理解と被災者への共感を深めたと考えられる。

グループとしての体験は、日中は各自がボランティア・センターの指示での活動に従事しているため限られているが、①大型バスではなく、乗車人数の限られた普通乗用車による送迎であったこと、②男女別の大部屋の利用であったこと、③夕食を共にしたことから、ふらっとーほくメンバーと参

加者（間）のコミュニケーションは豊富であったと考えられる。また、参加人数が多いときには、参加者がボランティア活動での体験を振り返るワークショップを宿舎で開催したこともあった。

(c) ツアー後の状況

ツアー後の参加者の交流は活発であった。Twitter、Facebook、ブログを活用した情報交換のほか、メールマガジンの発行も2011年5月に開始した。対面での交流も行われており、5月に都内で実施した交流会には、それまでの参加者延べ90名のうち、35名が参加した。また、10月には、ふらっとーほくが都内で「復興支援 青山ワールドマーケット」に出展したことを機に、参加者らが中心となって、亘理町の周知を目的とした「いちごパレード」を実施した。

4. 考察

前章で取り上げた2つのツアーでは、両ツアーの企画・運営者とも、参加者によるツアー後の支援の継続や広がり、つまり、積極的行動の実現を意図し、ツアー後の交流会を企画した。しかし、行動積極化の第一歩として計画された交流会は、南三陸町のツアーでは実現にいたらず､ふらっとーほくでは実現した。さらに、その他の自主的な活動も行われている。このことから、以下の考察が得られる。

(1) 参加者の目的、体験のインパクト、グループとしての体験の影響

第一に、ネットワーク形成や意識高揚には参加者の目的、体験のインパクト、グループとしての体験が大きな影響を与えることが先行研究により指摘されていたが、交流会への参加とその後の自主的活動の状況から判断すると、その指摘はこの2つの事例についても該当すると考えられる。

交流会が実現しなかった南三陸町ツアーにおいても、地域の関係者から参加者への情報提供は豊富であったため、一定の意識高揚は実現したと考えられる。しかし、参加者の目的は被災地支援以外にも、消費活動や同行者との時間を過ごすことなどが含まれていた。それに対し、ふらっとーほく参加者の目的は、ボランティア活動ということで比較的一致していた。加えて、南三陸町ツアーでは、参加者間の交流やグループとしての体験が時間的にも質的にも限られていたが、ふらっとーほくは、日中の共有体験は限られていたものの、ボランティア活動前後の時間では、少人数での移動や食事、大部屋での就寝までの時間を用いた交流などが可能であり、グループとしての体験を持つことができた。これらのコミュニケーションや交流は全てが意図的に計画されたわけではないが、同事例は、短期のボランティアツアーであっても、ネットワーク形成や意識高揚につながる活動や場を提供することができれば、ツアー後の活動への積極的な関わりにつなげることができる可能性を示唆していると考えられる。

(2) ツアー内容や参加者の体験に則した参加機会提供の重要性

次に、参加者のツアー後の継続的な課題への関わりを促進するためには、ツアーでの参加者の体験に則した参加機会の提供が重要だと考えられる。参加期間が短く、体験のインパクトも比較的限られている場合には、その限られたインパクトを継続的な関心や関わりにつなげるために、特に考慮すべき点である。

ここで取り上げた2つの事例のうち、南三陸町のツアーでは交流会は実現しなかった。それはツアー中のグループとしての活動が限られていたため､参加者間の再会やそこから生まれるネットワークを起点とした支援活動に対する関心が低かったためであると考えられる。しかし、再会や他のツアー参加者とのネットワークへの関心の低さは、参加者らの継続的な支援意思の欠如を必ずしも意味しない。グループとしての体験や時間の共有は限られていたが、南三陸町を実際に訪問し、語り部ガイドから話を聞いたことで、個々の参加者の南三陸町に対する理解や共感は深められたと考えられる。

このようなツアー体験を考慮すると、ツアー参

加後の地域課題との関わりについても、グループ活動ではなく、「個々」の参加者への働きかけの方が受容されやすいと考えられる。例えば、南三陸町の理解を深めるメールマガジンのような働きかけである。ボランティアツアーの参加者は、「信条と一致した生活の実践」（McGehee and Santos 2005）をしたいと考える傾向があると指摘されているが、こうした働きかけは、参加者に消費者、寄付者、納税者としての支援の可能性を気付かせる契機になる。

一方、ふらっとーほくのツアー後の交流会を含む働きかけは、ツアー内容や体験と一貫していたと考えられる。同ツアーでは、ツアー中に参加者間の交流の時間が比較的多くあったため、ネットワーク形成が進行していた。また、ツアー後もソーシャルメディアの活用で、参加者間のコミュニケーションは継続していた。

以上をまとめると、ツアー参加後の支援活動は、「能動的」から「受動的」な連続線上に整理できると考えられる。課題に対する意識高揚やネットワーク形成が強い場合には、課題に対する積極的な行動や他の参加者との再会への動機が強いため、参加者の能動的な行為を期待することができるであろう。一方、課題に対する意識は高揚したが変化の度合いが限られている場合や、参加者間のネットワーク形成が十分でなかった場合には、より受動的な関わり方が受容されやすいと考えられる。前者の場合には、対面交流を伴う交流会などが、後者の場合には、郵便やメルマガ、ホームページやブログによる情報提供など、一方向の情報提供が有効だと考えられる。また、その中間にある働きかけの方法としては、受動的な関わりと選択的な能動的な関わりが可能となるFacebookやTwitterのようなソーシャルメディアも有効だと考えられる。

(3) 主催・運営・募集団体間のコーディネーションの重要性

最後に、短期ツアーの限られた時間と体験の中で、(1) や (2) の指摘事項を実施するためには、ツアーの開始（もしくは申し込み時）から終了およびその直後まで、すべての時間を学びや交流の機会として有効に使うことが必要となる。そのためには、ツアーの主催、運営、募集を担う団体間での合意とコーディネーションが重要であると考えられる。

南三陸町の事例では、募集は旅行代理店によって行われたが、旅行中の役割分担は、移動と宿泊は旅行代理店、ボランティア活動の運営やツアー後の交流会の企画はNPOとなっており、複数の団体間でのコーディネーションが必要となっていた。バスでの移動時間を活用して語り部ガイドの話を聞くなど、コーディネーションの努力は見られたが、宿での時間はすべて自由時間であり、一般の観光旅行と変わりなかった。宿での時間の過ごし方についても旅行代理店とNPOが周到に相談することが出来れば、交流や日中の活動の振り返りが出来た可能性がある。

一方、ふらっとーほくの場合は、ボランティア活動の実施はボランティア・センターに依存していたが、それ以外の行程や募集については、ふらっとーほくが直接運営していたため、参加者の状況を理解し、状況に応じた活動内容の調整およびツアー後の働きかけを一貫して実施するための環境が整っていた。また、参加後の連絡のための情報も一元管理できた。

以上より、ツアーの全プロセスにかかわる関係者間の意図的なコーディネーションや積極的な情報交換の質は、時間の限られた短期ツアーでは、参加者の交流や学びに特に大きな影響を与えると考えられる。また、ツアー後の働きかけについても視野に入れ、参加者情報の共有やツアー後の連絡の可否についてあらかじめ合意しておくことが重要となろう。

5. おわりに

ボランティアツーリズムはネットワーク形成や意識高揚に効果的であることから、社会課題への一時的な参加手段としてだけではなく、中長期的な参加を促進する手段としても有効であると考えられる。しかし、その実現のためには、当初から

中長期の関係性構築を念頭においた取り組みが欠かせない。本研究では2つの事例から、ツアー中の参加者の目的共有や参加者間の交流、ツアーの特性に合ったツアー後の働きかけ、主催運営募集団体での役割分担とコーディネーションの重要性などを指摘した。

これらの要素が重要なのは、短期のボランティアツーリズムに限ったことではない。しかし、ツアー期間中に何度も交流や学習の機会が訪れるであろう長期ツアーとは異なり、短期ツアーではそのような機会が限定されている。だからこそ、ツアー参加者の積極的な行動を促進するために、あらゆる機会を用いてこれらの要素を確実に実行することが大切である。

本研究は、2つの事例のツアー中およびツアー直後についての経緯を考察したにすぎない。今後はさらに、より多くの事例の集積を進め、継続的な調査を行い、地域とツーリスト双方にメリットのある関係性の構築に有用な方策を明らかにし、実践者と共有することが必要であると考えられる。本研究がそのための小さな一歩となれば幸いである。

謝辞

本研究にあたっては、近畿日本ツーリスト株式会社の西垣武史氏、ユナイテッド･アースの瀬川映太氏、ふらっとーほくの松島宏佑氏と須子善彦氏に大変お世話になりました。心から感謝を申し上げます。

注

1）継続的な参加は1件とし、最初に参加した時期を開始時期として数えている。

2）国外在住または長期滞在時の活動を含むと思われる、現地での継続的な活動は除く。

3）ボランティアに関しては、Lyons（2003）が指摘しているように、「強制されず、無償で、他者を助ける活動」（Kendall and Knapp 1996）という初期の定義自体が揺らいでいる。授業や就職活動の一環として行われる学生のボランティア活動などの「強制されるボランティア」や有償ボランティアなどが存在するためである（Ellis 1997）。また、ボランティアの動機が、利他的動機に加え、利己的動機を含む複数要因からなりたつことは、今日、最も支持されている考え方である（桜井2007: 28）。

4）UNWTOの“Tourism Satellite Account: Recommended Methodological Framework 2008”による。

5）International Volunteer Program Associationの会員組織から実績のある組織（具体的には、American Jewish World Service、World PULSE、Mobility International USA）の参加者それぞれ4人、6人、6人を対象とした。

6）「変容的学習」は、成人教育における学習理論のひとつである（Cranton 1992=1999: 21-27）。様々な人生経験を持つ成人に経験を解釈する前提の批判的な振り返りと再形成を促す意識変容の学習は、「知識の獲得という認知的レベルではなく、ものの見方や考え方、すなわち価値観の変容という本質レベルにおける変容を伴う学習」（Cranton 1992=1999: 26）である。

7）10の変容的学習プロセスとは、①方向を喪失させるジレンマ、②自己分析、③自己の役割に関する前提と新たな役割によりもたらされる疎外感についての深い評価、④自己の不満や同様の体験の他者との共有と分析、⑤新たな行動を実現する方法の探求、⑥新たな役割を実行するための能力や自信の構築、⑦行動計画の作成、⑧行動のための知識や技能の獲得、⑨新たな役割の試行とそれに対する評価、⑩自己の新たなパースペクティブが提示する条件に基づいた生活への再統合、である（Mezirow 2000）。

文献

桜井政成，2007，『ボランティアマネジメント――自発的行為の組織化戦略』ミネルヴァ書房.

依田真美，2011，「ボランティアツーリズム研究の動向および今後の課題」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』12: 3-19.

――――，2012，「首都圏住民のボランティアツーリズムの参加と意識にかんする調査（2012年）」『観光創造研究』8: 1-48.

Broad, Susan Jennifer, 2003, “Living the Thai Life: A Case Study of Volunteer Tourism at the Gibbon Rehabilitation Project,” *Tourism Recreation Research*, 28: 63-72.

Butcher, Jim, 2003, *The Moralisation of Tourism Sun, Sand...and Saving the World?*, London: Routledge.

Callanan, Michelle and Sarah Thomas, 2005, “Volunteer Tourism, Deconstructing Volunteer Activities within a Dynamic Environment,” Marina Novelli ed., *Niche Tourism: Contemporary Issues, Trends and Cases*, Oxford: Elsevier, 183-200.

Coghlan, Alexandra, 2008, “Exploring the Role of Expedition Staff in Volunteer Tourism,” *International Journal of Tourism Research*, 10: 183-191.

Coghlan, Alexandra and Margaret Gooch, 2011, “Applying a Transformative Learning Framework to Volunteer Tourism,” *Journal of Sustainable Tourism*, 19（6）: 713-728.

Cranton, Patricia, 1992, *Working with Adult Learners*, Toronto: Wall & Emerson.（＝1999，入江直子・豊田千代子・三輪建二訳『おとなの学びを拓く――自己

決定と意識変容をめざして』鳳書房.）
Ellis, Susan J., 1997, "Trends and Issues in Volunteerism in the U.S.A.," *Australian Journal on Volunteering*, 2 (2) : 29-34.
Gray, Noella J. and Lisa M. Campbell, 2007, "A Decommodified Experience? Exploring Aesthetic, Economic and Ethical Values for Volunteer Ecotourism in Costa Rica," *Journal of Sustainable Tourism*, 15 (5) : 463-482.
Kendall, Jeremy and Martin Knapp, 1996, *The Voluntary Sector in the United Kingdom*, Manchester: Manchester University Press.
Klandermans, Bert, 1992, "Transient Identities? Membership Patterns in the Dutch Peace Movement," Joseph Gusfield, Hank Johnston and Enrique Larana, eds., *New Social Movements: From Ideology to Identity*, Philadelphia: Temple University Press, 168-184.
Knoke, David, 1988, "Incentives in Collective Action Organizations," *American Sociological Review*, 53: 311-329.
Lo, Ada S. and Candy Y. S. Lee, 2011, "Motivations and Perceived Value of Volunteer Tourists from Hong Kong," *Tourism Management*, 32 (2) : 326-334.
Lyons, Kevin D., 2003, "Ambiguities in Volunteer Tourism: A Case Study of Australians Participating in a J-1 Visitor Exchange Programme," *Tourism Recreation Research*, 28 (3) : 5-14.
Marshall, Gordon ed., 1994, *Oxford Dictionary of Sociology*, New York: Oxford University Press.
McGehee, Nancy Gard, 2012, "Oppression, Emancipation, and Volunteer Tourism: Research Propositions," *Annals of Tourism Research*, 39(1): 84-107.
McGehee, Nancy Gard and Carla Almeida Santos, 2005, "Social Change, Discourse and Volunteer Tourism," *Annals of Tourism Research*, 32 (3) : 760-779.
McGehee, Nancy Gard and Kathleen Andereck, 2009, "Volunteer Tourism and the "Voluntoured": The Case of Tijuana, Mexico," *Journal of Sustainable Tourism*, 17 (1) : 39-51.
McIntosh, Alisson J. and Anne Zahra, 2007, "A Cultural Encounter through Volunteer Tourism: Towards the Ideals of Sustainable Tourism?" *Journal of Sustainable Tourism*, 15 (5) : 541-556.
Mezirow, Jack, 2000, "Learning to Think Like an Adult: Core Concepts of Transformative Theory," J. Mezirow and Associates, *Learning as Transformation: Critical Perspective on a Theory in Progress*, San Francisco: Jossey-Bass, 3-33.
Sin, Harng Luh, 2009, "Volunteer Tourism: "Involve Me and I Will Learn"?" *Annals of Tourism Research*, 36 (3) : 480-501.
Tourism Research and Marketing, 2008, *Volunteer Tourism: A Global Analysis*, Barcelona: ATLAS.
Ver Beek, Kurt Alan, 2006, "The Impact of Short-term Missions: A Case Study of House Construction in Honduras after Hurricane Mitch," *Missiology: An International Review*, 34 (4) : 477-496.
Wearing, Stephen, 2001, *Volunteer Tourism: Experiences That Make a Difference*, Wallingford: CABI Publishing.
Wearing, S., and J. Ponting, 2009, "Breaking Down the System: How Volunteer Tourism Contributes to New Ways of Viewing Commodified Tourism," Tazim Jamal and Mike Robinson eds., *The SAGE Handbook of Tourism Studies*, London: SAGE.

よだ・まみ　北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程。主な論文に「ボランティアツーリズム研究の動向および今後の課題」(『国際広報メディア・観光学ジャーナル』12, 2011)。観光学専攻。